

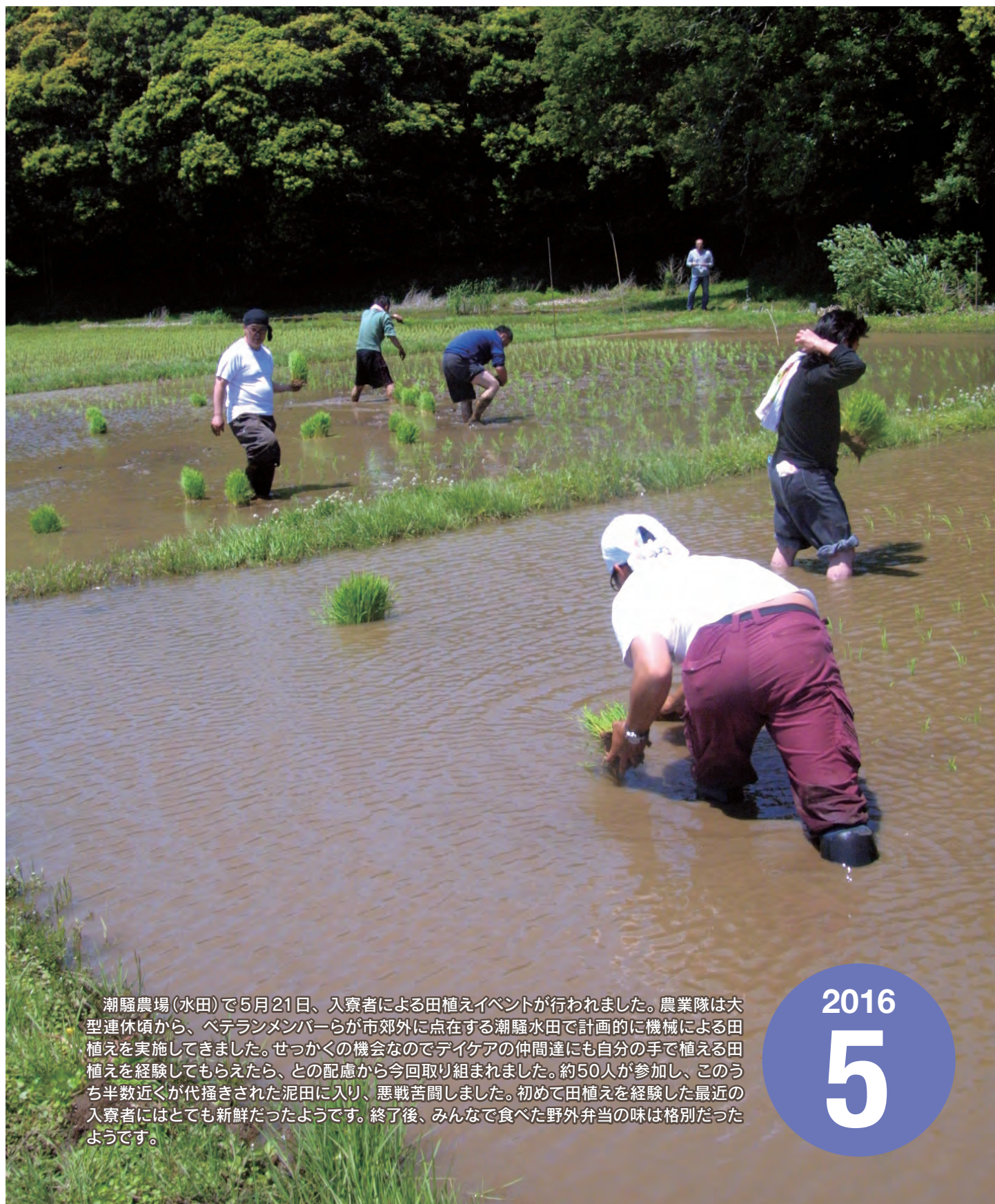
潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!



潮騒農場(水田)で5月21日、入寮者による田植えイベントが行われました。農業隊は大型連休頃から、ベテランメンバーらが市郊外に点在する潮騒水田で計画的に機械による田植えを実施してきました。せっかくの機会なのでデイケアの仲間達にも自分の手で植える田植えを経験してもらえたら、との配慮から今回取り組まれました。約50人が参加し、このうち半数近くが代掻きされた泥田に入り、悪戦苦闘しました。初めて田植えを経験した最近の入寮者にはとても新鮮だったようです。終了後、みんなで食べた野外弁当の味は格別だったようです。

2016

5

仲間達の 「生きるを支える」 試みをしたい



先月号でも触れたように、私はこの4月から普通の人よりも半世紀以上も遅れて地元の県立高校で学んでいます。孫世代よりも若い生徒達と一緒に夜間に机を並べて学び合うことは、とても新鮮で貴重な体験です。昼間通常の仕事や対外業務をこなした夕方から勉学に励む生活は、正直なところ73歳の体には相当きついです。夜10時頃に帰宅すると、もうバタンキューです。なんとか土日に頭と体をリフレッシュさせ、また月曜からの仕事と勉学に備えるという具合です。でも、施設に居る時とは異なる程よい緊張感や充実感を得ており、生きる希望や張り合いを手にしています。この経験によって私は、自分のフィールドである依存症の世界を相対化して捉え直すことができるように思います。もしかして潮騒JTCの今後の方向性を指し示す可能性を秘めているかな、とも考えています。

薬物やアルコール、ギャンブル問題に囚われて日々駆けずり回っていると、この狭い世界だけの考えに陥りがちです。私達はよく「ダルクや潮騒の常識は世間の非常識」と口にしますが、やはり世間の常識には無視できない重みがあります。自分達だけの世界だけで生きられるならいいですが、私達も社会を構成する一員です。社会に認められる努力を放棄すれば、やがてはカルト集団化して世間から相手にされなくなります。社会で通用する人間になるには、どうしても自分達を冷静に見つめ直す「学び」が必要です。脳科学などまったく門外漢の私ですが、高校での新たな「学び」は、私がこれまで使っていなかった部分の脳を刺激し、依存症だけでは解けない課題へのチャレンジ精神を活性化させました。これは私自身の認知症防止やアンチエイジング(若返り)にも役立っています。

実はダルクでも依存症の回復の意味や活動の在り方を問う動きがあります。三重ダルクでは、「依存症の仲間が生きていくことをどう支えるか」の難題に、独自のプロジェクトを通して手探りで挑んでいます。若い仲間、知的・精神の病気が重篤な仲間、発達障害問題が深刻な仲間、プログラムに乗れない仲間、施設になじめない仲間、意味なく反施設行為に出る仲間…、こうした多様化した仲間の登場に各地のダルクは苦慮しています。彼らをどう支え合えばいいのでしょうか。世間と同じように表面だけを捉えて、彼らを薬物やアルコール、ギャンブルに問題のある「だめなやつ」と決めつけ、否定するのは簡単です。

もしダルクや潮騒が世間と同じく、「回復できる人＝善」「回復できない人＝悪」の分かり易い図式で仲間を線引きするようになれば、回復施設が最も警戒すべき施設内での差別構造が生まれてしまいます。しかし、彼らも根本は依存症の括りを持った縁ある仲間達です。彼らにも、人として生き直しができる「何か」があるはずです。私はそこに希望を見出して、彼らの「生きるを支える」試みをしたいのです。言葉ではうまく表現できないもどかしさがありますが、高校での新たな「学び」からその可能性がほのかに見えてきました。

(センター長 栗原 豊)

NPO 法人・潮騒 JTC の平成 28 年度総会開く



NPO 法人・潮騒ジョブトレーニングセンターの平成28年度総会が5月22日、鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館4階会議室で開かれ、提出された前年度の事業報告や同決算、今年度の事業や予算計画の4議案がいずれも異議なく承認されました。潮騒を支える役員理事メンバーは互いに顔を見知った関係者ばかりでスムーズな進行となり、審議時間は1時間ほどでした。出席した理事からは、引き続き栗原センター長をNPO活動のかじ取り役に職員一丸となって、鹿嶋市を拠点とする鹿行地域の依存症ケアに努力してほしい旨の期待が感じられました。

議事に先立ち、法人理事長の栗原センター長は、「潮騒もNPO法人になり7年目、皆様のご支援で、少しずつ地域の信頼も高まり、地元に着根を図れるようになってきています。行政や関係機関、支援団体の信頼も徐々に高まっています。その流れの中で、依存症を抱える120人を超えている仲間の施設を任されていると、つい無理する場面が多くなります。でも、私達には無理は禁物です。私は今春から高校でも勉強しているので、仕事とのやり繰りが大変です。こうした自分の力量を超える多忙化の中では、余計に自分を見失いがちです。それだけに苦しい時には“弱音”を吐こうと思います。できることとできないことを見極めながら、等身大の運営を心掛けます」と挨拶しました。

この後、議長には理事で渋谷ダルクの坪倉洋一さんを

選出。議事に入り、書記・議事録署名人を選んで、平成27年度事業報告、同決算報告・監査、平成28年度事業計画、同予算を、いずれも事務局提案の原案通りに意義無く、全会一致でご承認頂きました。このうち、事業報告や今年度の事業計画の中には、潮騒が独自に取り組む就労支援のプログラムが充実し、潮騒農業が順調に発展していることや地域貢献としても定着してきた作業隊の活動が活発化していることが明らかにされ、これに重心を置く事業が盛り込まれました。特に、今年度は新たに6月施行の刑の一部執行猶予制度への受け皿づくりや、就労支援の一環として試験的に北浦での漁業や水産加工に挑戦することが加えられました。決算では、これまでの赤字体質が改善されつつあり、より一層無駄をなくすなどして財政健全化に向けての努力が求められることも確認されました。なお、今年度は役員改選期ではないため、これに対する議案の提出はありませんでした。



▲100人を超える大所帯だけにNPO法人の運営には苦労も多い



「生きていく」ことに必要な 内面の成長を促す



潮騒 JTC に入寮している薬物・アルコール・ギャンブル依存症者の各種学習ニーズに応え、人間的な成長を促す自主企画「潮騒人間塾」の第1回イベントが5月20日、鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館3階の食堂兼多目的フロアで開かれました。既存の「教育」の枠組みや常識に囚われずに、よくある一方通行の講座型ではない双方向の入寮者参加型の取り組みで、依存症者が身に付けていない社会性や常識の体得や「生きていく」ことに必要な内面の成長、さらには各種能力のスキルアップを目指すのが狙いです。運営体制が固まるまでは不定期の開催ですが、できるだけ入寮者の希望に沿った企画内容で、年に数回の取り組みをしていきたい考えです。

潮騒ミーティングとは 一味違うワークショップ



第1回は、開講記念として既に紹介しているように元都立高校教員でカウンセラーとしても力量を発揮している八覚正大(はつかく・まさひろ)さんをお招きし、潮騒のグループ・ミーティングとは一味違うユニークなワークショップに取り組みました。八覚さんは紙と割りばしを

使い、私たちが普段何気なく見過ごしている新たなイメージの世界の広がりや、日常の生活では当たり前となっている常識や固定観念に縛られてすっかり忘れていた3次元的発想の素晴らしさなど、入寮者に新しい気づきをもたらしてくれました。割りばしを手を持つことで、好きな食べ物などをイメージしてもらい、食の意味を人間関係の世界にまで拡張したり、役割分担を仮想することで新たな自分を発見するロールプレイングにも挑みました。参加者の一人は「自助グループのミーティングは言いっぱなし、聞きっぱなしだけど、今日の試みではいろいろ聞けてよかった。仲間についても新たな発見が多かったし、潮騒でのやり方とは違う意味で集団でやることの面白さを感じた」と手応えを得ていました。

この日は開講に当たって、栗原センター長が「施設にいと依存症の回復を第1にして全てが許されると勘違いして、与えられた権利にあぐらをかいてしまいがちだが、私は高校に行き始めて改めて社会の常識の重さを肌で感じられた。施設における甘え過ぎを改善し、社会の規律や人間関係の厳しさを学ぶことも必要だと痛感した。潮騒人間塾ではこうした難題に敢えてチャレンジしたい。その意味で現場経験が豊富で人間として魅力ある八覚先生が、私たちの味方になってご指導を頂けるのはとても心強く、有難い」と冒頭あいさつをしました。

高校で学ぶ栗原センター長の 前向きさが刺激に



人間塾のきっかけは、73歳で念願だった高校入学を果たし、施設での仕事と勉学を両立させながら毎日、新たな「学び」に挑む栗原センター長の前向きな姿勢が刺激となっています。こうした動きを施設全体でしっかりと支えながら、入寮者の回復に不可欠なスピリチュアルな成長を補完する仕組みを整えようという、手探りの試みです。

開塾の背景には、高齢化、重複障害、依存症以外の病歴や障害など最近の多様化する潮騒入寮者の動向と課題があります。こうした病態の多様化による依存症リハビリ施設としての受け入れ枠を超える仲間の登場により、ダルクや潮騒では従来の考え方では対応できない現実直面し、もはや施設側が提供する既存のプログラム(12ステップ等)だけでは、回復にとってクリアすべき人間的な成長を促せない困難な現実が生まれています。その一方で、薬物やアルコール、ギャンブルに問題を抱えることが、世間では「ダメな人間」「社会の落ちこぼれ」「役立たずの余計者」として、あたかも全人格が否定されるような、厳しい社会の流れが固定化しています。

困難な施設の課題に 自力で風穴を開けたい



このため、依存症当事者の社会復帰や生きるための多様な可能性が閉じられて、本人も新たな分野への挑戦をためらう傾向があります。加えて潮騒では、このところの60歳以上の高齢入寮者の増加で、施設全体の雰囲気が活性化しにくくなっています。こうした問題に、新たな試みにより自力で風穴を開けたいとの思いから「潮騒人間塾」の企画がスタートしました。今後の運営については、スタッフ会議やプロジェクト推進会議に諮りながら、必要ならば実行委員会の常設も検討していく考えです。

人間塾では、▽定時制・通信制高校等への進学支援と入学後の教科教育支援 ▽通信制大学や社会人卒の大学等への進学支援 ▽各種学習に関する相談受付とカウンセリング対応 ▽各種資格取得に関する実務面での支援と相談受付 ▽趣味や教養、文化講座の開催 ▽人間的な成長を促す講座・講演の開催—を柱に多彩な中身を盛り込んでいます。当面は、依存症には欠かせない謙虚な生き方を他分野の経験から学ぶことと、入寮者の多くが不得手としているコミュニケーション能力のスキルアップに主眼をおいた企画に力を入れる予定です。

【八覚正大さんプロフィール】

1952年東京都練馬区生まれ。都立国立高校、早稲田大学理工学部と都立大学人文学部を卒業後、都立高校の教員に。教職の傍ら東京学芸大学大学院で心理学やカウンセリングを学び、自らの教育指導に厚みを加えた。33年に及ぶ教員生活の大半を、心を病んだり、問題行動に追われる定時制高校や教育困難な高校に在籍。多様な問題を抱えた生徒達の内面に響く優れた教育を実践し、あくまで現場の一教員として生徒と向き合う教師人生を貫き通した。定年退職後は、精神対話士として心理ボランティアもこなし、自身が代表を務める自主研究会「関係修復協会」を、活動拠点となっている国分寺市内の団地で毎月開いている。ほかにもニューライティングの会代表、不登校フリースクール「梧桐(あおぎり)学苑」国分寺校校長、悩める母親の会主宰など多彩に活躍。また、作家・詩人としても優れた作品をものにし、新潮新人賞を受賞するなどメジャーデビューまでもう一步まで上り詰めている。以前から依存症問題には関心を持っていたが、今回縁あって潮騒との関係が生まれ、昨年12月には潮騒に来訪して施設や農場を視察し、今年2月には栗原センター長が関係修復協会の定例会に招かれてメッセージした。今後、潮騒人間塾を背後で支える指導・助言者の一人として期待される。



第5回「スポンサーシップの絆が互いの回復と成長に繋がる」

ユタカ vs トム 対談



——今回は、栗原センター長とトムさんの関係の絆をなすスポンサーシップについて伺います。12ステッププログラムを薬物依存の回復に援用したと同じように、これもAAのシステム原理をダルクや薬物依存の自助グループ流に応用したものです。ステップが回復に向けた魔法の杖なら、スポンサーシップはプログラムの取り組みが挫折しそうなことを防ぐための「転ばぬ先の杖」という理解でいいですか？(司会進行・広報部)

いつでも相談にのってもらえる 柔軟な関係

トム いいと思います。僕が言うのもおこがましいけど、ダルクを含むいわゆる12ステップグループのメンバーになると、ある時点でスポンサーと呼ばれる人を選ぶことになります。同じ依存症に苦しんだ経験を持ちながらも、一足先にダルクや自助グループにつながった、自分の先を歩んでいる回復者です。何か困ったことがあった時、例えばアルコールを飲みたくなったとか、クスリを使いたくなった時、寂しくてどうしようもないという時に、僕はスポンサーに連絡をとることができます。いつでも相談にのってもらえる関係ですね。

で、相談を受ける人をスポンサー、相談する人をスポンシーと呼びますが、これは師弟や親子関係のようなものではありません。ダルクでは仲間が常に対等な立場で回復を目指すわけですから、上下関係はありません。一方的に何かを教えたり、教えられたりする関係でもありません。共に歩むというイメージでしょうか。スポンシーはスポンサーを自由に決めることができるし、いつでも替えられます。逆にスポンサーの側から降りることもできま

す。この関係は永久不変ではありません。それこそ波長が合わなければ解消していいわけです。うまくいかない場合は他のスポンサーを探せばよい、となります。ただし、二人は同性同士が望ましく、当然ながら秘密を守ること大前提です。

——ダルクに繋がったとはいえ、入寮者が回復プログラムを独りで実行するのは困難ですから、やはり生涯治療の依存症には仲間と一緒に歩むことが欠かせません。回復のプログラムを伝え、これを支えて、ガイド(案内)してゆくのがスポンサー(提供者)の役割ですが、両者の関係を繋ぐ(=シップ)ことで、提供するものとされるものが人間同士、同じ苦しみを味わった者同士としてつながり、解決方法を伝えてゆくという在り方はとてもユニークですね。

トム だから、この原理は他のアディクションにも広く応用されています。スポンサーシップは自分たちの経験と力と希望を、先輩回復者が自分の後続く仲間伝えるものです。一歩先に回復の歩みをしているアディクトが、まだ解決を持たずに苦しんでいるアディクトに手渡してゆくものなので、世間によくあるような単なる愚痴や悩みの相談相手ではありません。

仲間からの孤立を防ぐのが スポンサーシップ

ユタカ 依存症は別名「孤独の病」ですから、仲間から外れて孤立することが一番怖い。簡単にスリップの原因になりますからね。だから孤立を防ぐのがスポンサーシップだと私は考えています。日々ミーティングに参加して、みんなと繋がっていれば問題はないのですが、独

りになると、とたんにこの病気が頭をもたげてくる。みんなの中に居るように見えても、実は心がミーティングから離れている場合もある。いつも「パス！」ばかりで、仲間の話を聞いているようで聞く耳を持ててない場合です。そういう時に、自分の問題を直接伝えられるスポンサーシップは効果を発揮します。私のように、考える前に行動を起こしてしまう人間には、とても有難い仕組みです。実際、私は何かあるとすぐにトムさんに電話して相談を持ち掛けてしまいます。トムさんには迷惑かもしれませんが…。

トム いえいえ、そんな事はありません。むしろ私の方がユタカさんから勉強させてもらっています。何たって人生経験においては年上の先輩ですから(笑)。

——確認なのですが、お二人のスポンサーシップは互いの手紙のやり取りが発端でした。逮捕されて孤立無援だった栗原センター長に、素早くトムさんが手紙をくれたことで、そこから信頼関係が生まれた。数年ブランクがあつて、センター長が鹿島ダルクから離れて独立したものの、すぐに行き詰ってしまった。そこでトムさんに助けを求めた。それが今日の強固なスポンサーシップに繋がっている訳ですね。

ユタカ 発端は16年前、私にとって7回目の受刑となる逮捕時に始まった文通です。あの頃は幻聴が一番ひどくてね。そんな人間を刑務所に送るより、まずは病院での治療が先だろう、ってね。だからトムさんには、幻聴を止めて罪を軽くする方法を教えてもらいたかった。それが手紙を出した本音でした。でもトムさんの返事には、何一つ私の苦しむ幻聴へのアドバイスはなく、がっかりでした。でも、信じられないほど素早く返事がくるので、一体どういう人なんだろう、と。その興味が、後に生涯にわたるようなスポンサーシップにまで発展するきっかけです。

「この人なら自分を支えてくれるかな…」

——トムさんからの最初の手紙の内容は今でも覚えていますか？

ユタカ だいぶ時間はたったけど、トムさんからもらった手紙は今も私の手元にしっかりと保管してあります。確か最初の時は、手紙と一緒に近藤恒夫さんの本も送ってくれました。姪の熱心な根回しがあつた訳ですが、その手紙には「私も栗原さんと同じように、10代後半から40代後半まで約30年の間、覚せい剤等の薬物を使い続けてきました。刑務所も二度入り、もうどのように生きていけば良いのか、まったくわからない状態が続いており

ました。それでも周りの人たちの協力でなんとかダルクにつながる事ができて、同じ病気を持つ仲間達と一緒に活動する中で、今日までクスリもアルコールも止まっています。栗原さんの問い掛けの答えにはなっていないかもしれませんが、これから後も様子をお知らせください。出所後には一緒に薬物からの回復のプログラムにつながることを、同じ病を持つ仲間として祈っております…」っていう内容でした。

——センター長には、とても新鮮だったんですね。その後も複数回、手紙のやり取りが続く訳ですが、その後の手紙で印象に残っていることはありますか？

ユタカ 何回目かの便りには、便箋三枚分にトムさんのクスリをめぐる混乱の日々や、周囲の人たちが離れていった様子がびっしり綴られていました。そうして「もしクスリやアルコールのない日々が維持できれば、会うことができなかつた人々と再会することができるし、新たな関係だって広がっていきます。私のような者にだってできたのだから、きっと栗原さんにもできます」という激励の言葉が添えられていました。「何かお聞きになりたいことがありますたら、私たちになんなりとお聞きください」と書かれてあり、その頃はスポンサーシップなんて知る由もなかつたけれど、「この人なら自分を支えてくれるかな…」という漠然とした思いが芽生えました。

トム 僕の方は、すっかり忘れていました。ごめんなさい。でも、ユタカさんとのスポンサーシップは僕自身の成長にもつながっています。むしろ僕の方がユタカさんに助けられるってますよ、いろんな面でね。

他人の評価を気にせず 自分の問題に向き合う

ユタカ その後の話ですが、トムさんとのスポンサーシップの大切さを身をもって知らされた大事な体験があるんです。鹿嶋市役所前のアパートで、潮騒の前身となる「鹿嶋潮騒ダルク」として細々と活動していた時期なんです。が、当時はまだオウム事件の余波もあつて、まだまだ私達を見る世間の目がとても厳しかったんです。そんな折に公平公正であるはずの行政マンが直接、来所して調べもせずに、私達を一方的な偏見と色メガネで見ていることが分かり、私は心が打ちひしがれました。かつて任侠道時代には怒りに任せて行動していたので、その記憶が蘇り、私の怒りは爆発寸前までいきました。

その時の状況を話せばこうです。もう10年くらい前ですが、他県のある市役所の福祉担当職員から依存症の人を入寮させたいとして、鹿嶋市役所に潮騒についての問



い合わせがありました。その時に市役所の担当者が、「潮騒？ 得体の知れない施設ですよ！」と伝えていたことが私の耳にも伝わりました。私は怒り心頭に達し、「それで役人の言う言葉じゃないだろう。役所はニュートラルじゃないのか。俺たちの活動を潰したいのか！」って。過去の任侠道時代を彷彿とさせるように、もう、すぐにも窓口に乗り込む勢いでした。

でも、なぜか一呼吸おいて、まずはトムさんに意見を求めてからにしようと、急いでトムさんに電話したんです。少しはプログラムが身につけていて、成長していたんですかね。よく分かりませんが…。するとトムさんはいつもの冷静な口調で、こんなふうに助言してくれました。あまりにも的を得た箴言(しんげん＝戒めの言葉)に思えたので、それをすぐメモしたんです。そして、自分を抑えれずに感情の赴くまま動こうとするときに、いつも読み返すんです。それは、こういう内容でした。

「ユタカさん。あなたの怒りは十分に分かります。でも、僕らは毎日プログラムを通して、自分を変えようと努力していますよね。ダルクのプログラムは他人よりも自分を変えるプログラム。世間にある対立や競争とは一線を画しましょう。自分たちがどう見られているか、他人の評価なんて気にしないでください。その関心を、自分自身の問題だけに向けましょう。世間の視線や評価とは関係なく、自分達の居場所が確保できていることに感謝しましょう。僕たちは曲がりなりにも回復していることを忘れないでください。その“許しと寛容”があれば、周囲もやがては“共感と癒し”変わっていきます」と。目から鱗でした。あの時は自分の未熟さを大いに恥じました。

—— スポンサーシップを象徴するいい話ですね。

ユタカ 苦い思い出もあります。3年前、孤立した状態で死んだアルコール依存症の仲間の教訓です。彼は潮騒で順調に回復し、スタッフとして成長していました。いずれは施設運営の一翼を担ってほしい人材でしたが、予期しない事にたった一人の家族だった母親が急死しました。喪主の彼は葬式のために一時帰郷し、一通り事後処理を終えたら潮騒に復帰するつもりでした。でも、親戚が「あんな施設に戻ったら一生自立できないぞ。ちゃんと就職して家を守れ！」とプレッシャーを掛けたことから、彼は板挟みとなって悩み続けました。間もなく自宅での問題飲酒が再燃して、自殺のような形で命を落としました。私は彼のスポンサーでしたが、多忙さと職務に追われて彼からじっくり話を聞けず、とても悔やみました。彼の死と引き換えにスポンサーシップの大切さを教えられた、とても切なく辛い体験です。(次号に続く)

Q 私は薬物、アルコール問題によって刑務所との往復を繰り返しており、もはや出所しても頼れる身内や知り合いは一人もおられません。こんな私ですから、働く場所を見つけることは非常に困難です。そんな中で同囚から「世間が見捨てるような自分たちを、唯一助けてくれる最後の居場所がある。茨城県鹿嶋市にある潮騒ジョブトレーニングセンターという所だが、一度連絡してみてもどうか」と、潮騒ジョブの存在を教えられ、ご連絡しました。出所後、そちらにお世話になるとして、心配なのは生活費の問題です。毎月16万円もの寮費負担はとて私には無理なのですが、入寮者の皆さんはどうしているのですか？ お金のない者は、依存症の回復を諦めなければならないのでしょうか？

A そんな事はありません。潮騒JTCでは、依存症の回復はこの病気に苦しむ当事者に与えられた共通の権利だと考えます。問題は本人のやる気です。回復に向けた本気度です。家族の支援があればベターですが、それがなくても当事者が高いモチベーションを維持し、施設が提供するプログラムに地道に励めば回復に向けて希望が持てます。なので、回復したいと思う受刑者であれば、社会的な地位や立場や職業、財産の有無などに関係なく、潮騒は全力を挙げてその回復を支援します。

とはいえ潮騒JTCは零細な一民間施設です。行き場のない依存症者の貴重な居場所として機能し、信頼や評価を頂けるまでになったのは有難いですが、運営費のやり繰りにはとても苦労しています。潮騒JTCに繋がるケースでは、あなたと同じような立場の人がほとんどですから、まず自力での寮費負担は無理です。幸い、多くの入寮者が憲法に保障された最後のセーフティネットである生活保護を受給しており、これによる拠出金で基本的には施設運営が成り立っています。しかし、種々の理由や制約により福祉制度の恩恵に繋がらない難しいケースもあります。過渡的かつ限定的(おおむね6カ月)ですが、受刑者であれば緊急避難的な措置として一定の条件下で、自立準備ホーム制度(潮騒JTCも受託)の恩恵を受けることができます。むしろ施設側が危惧するのは、こうした社会的な支援制度に依りかかることが、当事者の生活自立や就労への意欲など前向きな姿勢を削ぎ落す結果にならないか、という問題です。いつの間にか生保受給が当たり前になり、制度本来の自立支援の趣旨とは裏腹に、生きる意欲を失った無気力人間になってしまうことです。そうならないために、回復に向けた日々の地道な取り組みが大事になります。

デイケアの仲間が息栖神社で 初の清掃ボランティアに励む

デイケアのプログラムを活性化させようと、4月下旬に神栖市の息栖神社でデイケアの入寮者仲間17人が参加して、自主的に清掃ボランティア作業に励みました。これは私が以前からやりたかったことで、栗原センター長に相談を持ち掛けたところ、「元旦の和太鼓初打ちでお世話になっている息栖神社に打診してみたらいい」との助言を受け、今回初めて実現しました。デイケアでは高齢の入寮者が増えたこともあり、日中無為に寝ている仲間の姿をよく見かけます。私はデイケアの責任者として危機感を覚え、悩む日々が増えました。何とか自分達なりの仕方地域貢献のボランティア活動ができないものかと思案し、自分達の努力で停滞気味の環境を改善したいと考えました。こちらの意向を打診したところ、息栖神社側から快諾の返事を受けることができました。当日は、デイケア全体から見れば少ない人数ながらも17人が参加してチームワークを発揮し、境内のゴミを拾い、掃き掃除で落ち葉をかき集め、神社の周囲も綺麗にしました。神社側からは「とても綺麗になり、有難かった。また機会があればお願いしたい」との好印象を頂きました。今後、試行錯誤しながら、自分達の力でできる地域貢献のボランティア活動を模索していきたいです。(ツカ)



ソフトボール交流試合で 百寿亭チームと熱戦を展開

潮騒ジョブトレーニングセンターではスポーツプログラムとしてソフトボールが人気ですが、5月12日には親善交流を兼ねて五月晴れの下、中施設に近い大野第2球場で高齢者デイケア施設「百寿亭」スタッフチームと親善交流試合を行いました。結果は11対3で百寿亭チームの圧勝でした。両チームとも選手はもとより、駆け付けた仲間達の熱い応援が試合を盛り上げました。「勝ち負けではなく、仲間が集まり一つの時間を共有して皆が楽しめた」(チハルさん)とは言うものの、敗れた潮騒チームは「次こそはチーム一丸となって絶対に勝つぞ!」と雪辱を誓っていました。

潮騒ではこれまで、横浜ダルクや秋元病院チームなどと親善交流のソフトボール試合をこなしてきましたが、すぐ近くにある潮騒の関連施設でありながら、多忙化の中で百寿亭とはなかなかスポーツ交流の機会が持てませんでした。今回交流試合が実現し、応援の仲間達はバッターボックスに立った選手達に「気楽にいこう」「落ち着いて!」と励ましの声を掛けて後押ししていました。潮騒の選手達は「やっぱり負けて悔しいけど、終わってみると日頃のストレスが発散できてよかった。次はリベンジに向けて頑張ります」と話していました。



受刑者からの手紙

自分自身を乗り越え新しく出直すために今を頑張る

潮騒通信「どっこ生きてます」が届き、拝読させて頂きました。護国院の豆まきなど、季節の行事があり皆様方と盛り上がり、とても楽しそうで羨ましい限りです。ここの刑務所では、今年は節分の豆もバレンタインのチョコも出ることなく、寂しい日々を送っています。私は今年で54歳になります。誕生会でドーナツとコーヒーを頂き、ささやかなお祝いをしてもらいました。社会に居たら、仕事の忙しさで誕生日どころではない毎日でしたが、皆で祝ってもらおうと、この年になっても嬉しいものですね!!(笑)

そちらはもう春満開で桜も満開になっていると思いますが、こちらはようやく最近、春の兆しが見えてきました。桜が咲くまではまだ1カ月以上ありますが、気を引き締めて頑張ります。私はこの度の受刑生活で、仲間の大切さ、支えあうということの意味、やり直すということの厳しさ、そして壊してしまうのは簡単にできるけど、失ってしまったら、どんなに悔やんでも同じものは二度と手に入らない、という事を判ったような気がします。

私は人より遠回りをしながら生きているのかもしれないし、また不器用にしか歩んでこれなかった人生だけど、これからは自分の人生を変えたいと思います。変われるって事はいつだって、可能性があると思うし、変われるって事は、今日が駄目でも明日は上手くいくかもしれないから、絶対に諦めてはいけないと思う!!誰だって、すべてに満足して生きている訳じゃないし、ほんのささやかな希望を持ち自分自身を乗り越えて新しく出直す為に今を頑張ります。

でも私の本当の闘いは、社会復帰してからで、始まりの第一歩だと思っております。世の中には、出来ることよりも、ずっとたくさんの出来ないことがあるから、焦らずじっくりとやって行きたいと思います。まだ社会復帰できるまでは、一年以上ありますから、今はこの施設で体力作りに励んでおります。何をやるにも、体力がなければ始まりませんから…(笑)

(北海道 M・H)

正直なところ道中今が一番辛く感じている

ようやく4月に入り、ほんの少し暖かくなっていきまきたきようこのごろですが、施設長始めチハルさん、お変わりございませんでしょうか。いつもお便り有り難うございます。お陰様で私の方は相も変わらぬ日々ですが、どうにか頑張っておりますのでご安心ください。センターには約120人と随分大勢の方が生活されているんですね。それ程の人数とは少々驚いております。当然ミーティングなどは2回になりますよね。私も帰りましたら、皆様とともに歩んで行きたいと考えております。チハルさんに色々教示を受け学んでいけたらと思っております。

ここでは時々教育的処遇日には、ビデオテレビでダルクの様子などを見ております。正直なところ道中今が一番辛く感じております。より気を引き締めゴールまで頑張らなければと思っております。しかしゴールがこんな遠くに思えたことはありません。それだけに年齢的にも今回の務めが最後になると確信しております。まだまだ勉強する事多々有まして今後宜しくご教示願えたら嬉しく幸せに思います。もう二度とこんな辛い思いはしたくないのも本当の処であります。

ところで待ちに待った3類の進級を楽しみにしていたのですが、そのままの4類でぶつけ処の無い腹立たしさで、2日ほど眠れずガッカリしております。確かに舍房(夜独)で注意もうけているが、懲罰以外進級できない人間を見たことはありません。チョット考えられないでおります。もう何もかも投げ出してやろうかと考えましたが、施設長ならびにチハルさんら外部より応援をいただいていることを考え、思いとどまってもう少し頑張ってみようと思いました。食事面も相変わらず酷いもので、次から次と苦勞が有ります(笑)。いつもありがとうございます。

(北海道 F・T)

元プロ野球選手の清原和博・覚醒剤事件裁判が、なんとNHK夜7時のトップニュースで扱われました。ほかに報道すべき国の大事なニュースがあるだろうに、というのが施設側の本音です。もし清原が底つきして「裁判長、もう私は自分の力では覚醒剤を止められません。社会で再使用するよりも、どうか覚せい剤の使えない環境の刑務所に入れてください」と自分の無力を認めたら、本人が「2度としません」と述べる紋切型の「反省裁判」の流れを変えることができるのに…。(潮)

社会に戻ってからがまた新たなスタート

手紙ありがとうございました。所内の桜も散り、新緑の葉が春の訪れを感じさせてくれます。刑期も残り数カ月を切り、嬉しさ半分不安も半分といった気分です。毎週月曜日に、薬物の教育を受けています。宿題もあり充実した日々を過ごしておりますが、社会に戻ってからがまた新たなスタート。うまく気持ちを切り替えられるよう少しずつ気持ちを整理していきたいと思います。

「どっかい生きてます!」毎月送付していただきありがとうございます。チハルさんの回復記も毎回楽しみにしています。受刑者からの手紙はここで読むと複雑な思いです。ただ薬物と戦っているのは、自分だけではないという心強い気持ちにもなれます。まずは残りの刑期を引き続き、集中して事故のないよう、まじめにつとめ、健康な状態でそちらに行ければと思います。

熊本の大地震では多くの罪なき人の命が失われてしまいました。天災の恐ろしさを改めて思い知りました。しかし時間が経つと忘れてしまう薬物の恐ろしさと似ているのかとも思いました。今度こそ薬物の恐ろしさを忘れることの無いよう頑張りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。施設長にもよろしくお伝えください。

(茨城県 K・T)

薬を止められない人達の助けになれるように生きたい

4月に入り、多少は生活もしやすくなってきましたが、私は1カ月ほど前から腹水が溜まり、足がむくんでパンパンになって苦しい生活が続いています。年齢的にも体力的にも限界のよう気がしていて、早くお迎えが来て欲しいという気にもなっています。何とか来年まで頑張って、潮騒の方に行ってみたい気もしていますが、どうも難しそうです。外部の病院と違って、自分の思い通りに入退院が出来る筈もなく苦しい毎日を送っています。

チハルさんの手紙のように、たくさんのアディクトの人達が病気等に負けず頑張っておられる事も十分に判っていますので、私も皆さんに負けず何とか病気を克服して、潮騒の仲間の皆さんと気持ちを一つにして、残る人生をクリーンに生きたい。せつかくの御縁を大事にして、薬を止められずに困っている人たちの助けになれるように生きてみたい気がしています。その為にも頑張って病気に勝ちたいのです。もしも、生きて潮騒に行く事ができましたら、栗原センター長やチハルさん、そして以前面倒を見てくれたシュンさんの言う事を聞いて少しでも長生きがしたいです。(愛知県 K・M)

私は心の底から本当に覚せい剤を止めたい!

ここ北海道は4月も半ばだというのになんと、まだ雪が降っています。同じ工場の仲間達ものどが痛いと言ったり体調が悪いと言ったりしていますので、私もかぜ等を引かないように引き締めて受刑生活を送っております。先日センター長からの手紙が私の元に届きました。早速の返信ありがとうございました。お手紙を読ませて頂き私一人が悩み苦しんで居るのではないことが分かり、励まされ、嬉しくなりました。

そして、お手紙に書かれていました入所後一年以上のプログラムを受けるとのこと、私としましては一年、二年のプログラムで覚せい剤を止める事ができるなら、また覚せい剤を止めるのに必要なプログラムなら、是非とも前向きに頑張って受けたいです。約束は守ります。今まで二年や三年の無駄な刑務所生活を思えば、一年や二年のプログラム生活の方が何倍も意味のあることだと思います。私は心の底から本当に覚せい剤を止めたいです! センター長、どうか私の力添えになってもらえないでしょうか? センター長や本当に覚せい剤を止めたいと頑張っている施設の仲間達に早く会いたいです。

(東京都 W・K)

しおさい俳壇

5月のお題

耕す

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.29

センター長 栗原 豊

つぐなひの 今朝の一步に 青葉風
 芍薬の 満る世隔つ 高き堀
 威の失せて 若葉に埋もる 看視塔

青葉若葉の季節。この時期は、囚われの身にもどことなく活気がみなぎるように思えるから不思議だ。やはり人間も自然の一部だから、季節の移ろいに同調するのかもしれない。7度目の刑務所生活ですっかり世をすねた私にも5、6月はどことなく生命あふれるバイオリズムの恩恵で、「今度こそしっかり務め上げて更生しよう!」と、前向きなエネルギーが出て来たことを思い出す。この時期、私が務めた刑務所ではすぐ近くにある中学校の吹奏楽部の演奏慰問が恒例イベント化していた。さっそく私も、その感動を姪に宛てた手紙に書いた――。

「今日は、隣接する第1中学校の吹奏楽部の演奏の慰問がありました。50人近くの部員による演奏は、とても楽しいものでした。新入部員による楽器紹介もあり、まだ入部1カ月ほどで、まるで楽器に意地悪でもされているかのように、思い通りに吹けないところが大変面白かった。年に1回ですが、今回の慰問で通算34回にもなるらしいです。また、これまでに慰問を体験していた生徒による刑務所慰問の感想文の紹介もあり、大変に感動させられました。堀一つの隣同士の関係にあるといっても、そこは刑務所です。生徒たちは『刑務所と聞いて、最初はとても怖いところのイメージがあったのに、実際に慰問に参加してみて規律が厳しく、皆さんが規則正しい生活を送っていることに驚きました。どうか、しっかり更生してください!』との言葉には、つい涙腺が緩んでグツときました。秋には市民会館で定期演奏会が催されるとのこと。来年出所したら是非、生徒達の応援に行ってみたいと思います。もちろん君を誘ってネ」

刑務所慰問というと、慰問経験が半世紀以上の実績を持つ歌手で俳優の杉良太郎さんが有名だ。もっとも、当人は芸人の売名行為と見られるのを恐れ、テレビ取材などは敬遠していたという。できれば、潮騒も刑務所メッセージやエイサーによる刑務所への慰問活動ができたらと願う。(この項続く)

耕して
耕して父
逝きにけり

あべ

昭和四十年頃までは長男が農家を継ぎ、田畑や山林を守る風土が確かであったが、狭い耕地の多い地方では経済的にも苦しく過疎化が進む現状でもあります。それでも老いた者は都会の生活や仕事にもなじめず、狭いながらも田畑を耕して生きる。私の祖父母や母、また同級生も同様に故郷で耕し続けてきたことを思うと、胸熱くなる句でもあります。

特選句

耕人に
近寄り鋤の
音を聞く

もと

今では小形耕転機が発達して鋤で耕すのは少ないが、それでも家の近くの門畑や家庭菜園などでは鋤を使う。その畑を打つ人に近づいて鋤の音を聞くのも、句の作者も農家の経験があるのかも。旅やこの鹿嶋でも見れる光景だが、里も懐かしく、音を聞くに如実の実感のある句です。

特選句

耕すや
大地の出臍
筑波山

ゆたか

筑波山は関東の名山で歌会の山としても古来から名高い。この鹿嶋からも広い田畑に遠く浮ぶ様に見える、また利根川や霞ヶ浦沿いの広大な田圃(たんぼ)も代田の頃は湖を広げた様でもあり、遠くに見える筑波山は出臍(でべそ)の様でもあります。私に「湖の雲も汲み上げ田植え水」があり懐かしい句です。

特選句

今月の秀逸句

豊作を
祈り耕す
作業隊

ひろ

昔は集落共同で耕しから稲刈りまでを
しましたが、今では機械化が進んだので家
族や団体で耕しなどもやる、この詠は潮騒
ジョブの耕しか、作業隊と言うのも面白く
元気のある明るい句です。

家族でね
耕す畑
楽しいな

たかこ

今では家庭菜園や観光農園などがあり、
都会の人が田舎に少しの田畑を借りて野
菜や稲を作る。本来の農業ではないので耕
す間も稔りの日を想い楽しい。家族であれ
ば和気合い合いで笑い声も聞こえる様で
汗も清々しい句です。

耕すや
祖父母昔は
開拓団

みく

日本に稲が伝わったのは弥生時代と言
われ、その頃から個人も村も田畑の開拓に
励んだ。明治時代は北海道、また戦前戦後
は食料確保のため日本の各地で大小の開
拓が行なわれた。祖父母は何処の開拓団で
あったのか。故郷や祖父母が思う句です。

雪形の
狐の見ゆる
甲斐の晴

あお

原句の雪狐は高山の残雪の形ではない
かと想い、上の句にして見ました。雪形と
言い、種蒔き爺や代掻き馬、など新潟県で
は百六十の形が見れると言われる。以前に
安曇野の旅が懐かしい。

春耕の
土の柔らの
畝一本

しげ

耕しは冬にも秋にもありますが俳句で
は春が主で、雪解けの後の柔らかい畑や田
を耕す。この詠は畑を耕し畝を盛っている
のかも。土が柔らかいので真つ直ぐでな
く、少し太く曲りながらも畝が出来る。実
感のある懐かしい句です。

コスモスの
花壇耕す
晴天かな

しま

コスモスは今では観光用に広い畑や野
路に植えられまた自然に種が飛んで生え
るが、花壇にも植えられて六月から十月頃
まで可憐な赤やピンク、白の花を咲かせ
る。この詠は花の終りの耕しとも思える
が、やはり咲く日を待ちながら耕す方が楽
しい。

佳作

香菜を摘んで夕べの鍋にする	かーと	安らぐや畑も心も耕しぬ	そち
耕しの畑の隅の花菜かな	ひろ	陽を浴びて耕す朝やるみの友	かこ
見渡せば人みな老いて耕せる	あべ	初めてを耕し植えむ薩摩藩	いるか
一年の願いを込めて苗を植う	こば	耕すやすぐに額を伝ふ汗	めい
陽炎の向ふ耕す人のをり	あべ	耕して広き畑の夕べかな	みく
耕しも心込めたり稔り待つ	おの	田の中の一屋の灯り蛙鳴く	ゆたか
じゃが芋の畑耕す食べたいな	あみ	耕した裏の畑に虫の声	かつや
回復も祈り耕す吾がころ	れいこ	種撒ひて幾日や鉢の芽を待つる	ケン
晴天に畑耕す一仕事	なあな		

どっこい私も生きてます～我が回復記～「トンちゃんの回復記」

第3回

自分としては、それなりの夫婦だと思っていた。それが、20年も連れ添った仲なのに嫁さんから突然、「別れてほしい」と一方的に三下り半を突き付けられた。驚きよりも「なぜ…」という思いの方が強かった。その疑問は今もって自分の中で氷解していない。ずっと腑に落ちないまま引きずっている。でも、あの時は「そうか…」としか言えなかった。別に格好をつけた訳じゃない。自分たち夫婦には世間で言う“かすがい”となる子供はいなかったけれど、夫婦関係は良かった。稼ぎは多くなかったから贅沢はさせられなかったものの、人並みの暮らしはしてきたつもりだ。当然、周囲からは「離婚裁判をやればいい。向こう側が一方的に言い出したんだから、慰謝料を請求できる」と民事訴訟を勧める向きも多かった。でも、自分は素直に離婚届にハンコを押した。あの時は、妙に冷めた自分がいた。

考えてみれば、夫婦なんて元々他人同士がくつつく訳で、所詮は紙切れ1枚の関係という言い方がある。その意味では危うい関係かもしれないけど、自分には20年かけて夫婦で困難を乗り越えてきたという思いがあった。だから外からの力ではそう簡単に壊れない、固い殻のようなものをつくってきたと考えていた。でも、それは幻想だったのか？一端この殻に亀裂が入れば、割れるのは簡単なのだ。悲しい事だが、世の中にはうまくいっているように見えても、ダメになる関係はある。友人、夫婦、親子、兄弟の関係であれ、ダメなものはダメなのだ。殻にひびが入るのは、やはりお互いに問題があった、と見るべきだろう。交通事故の過失相殺のように、どっちが悪いかなんて数値化して簡単に判断できない。

前回にも触れたように、自分にはどこか人間関係において妙に冷めたところがある。潮騒に繋がってアルコール依存症について学ばせてもらったことで、自分の何が問題かを考えるようになった。自分なりに冷静に自己分析すれば、アルコール依存症の機能不全家族の下で、知らず知らずのうちに形成されたAC(アダルト・チルドレン)の資質が、結婚生活で災いしたのかもしれない。自分の生き方には、家庭内や友人知人、仕事上の関係でも人間関係で起こるトラブルを回避するために、周囲に合わせることを優先してしまう傾向がある。なるべく本当の自分を抑える生き方をしてきた。それが相手に対する優しさだと勘違いしていたようだ。もしかして長年連れ添った嫁さんは、そうした自分の生き方が負担になったのかもしれない。優柔不断な生き方が危うく思えたのだろうか。そして、もう我慢の限界だ、となった？それも自分の想像だけ…。

私は私 あなたはあなた／私は私のことをする／あなたは あなたのことをする／私は あなたの期待にこたえるために／この世に生きているわけではない／あなたは 私の期待にこたえるために／この世に生きているわけではない／あなたはあなた／私は私／偶然ふたりが出会えば それはすばらしいこと／出会わなければ仕方のないこと(ゲシュタルトの祈り)(以下、次号に続く)

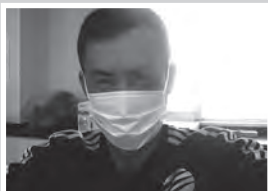
5月のバースデイ

シュン



なんもねえー

フジ



がんばりマッスル

イチ

私は私なりに
頑張らせて頂きます

長吉

これからもよろしく
お願いします。

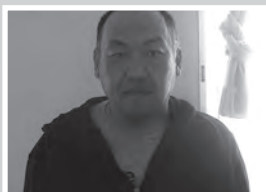
アキラ

一日一日
元気で居られれば良い

マサヒロ

私なりにこれからも
頑張らせて頂きます

グッチ

これからも一生懸命
頑張ります

5月の行事予定

- 8・21日 秋元病院メッセージ
 12日 潮騒俳句会
 19日 潮騒映画会
 20日 潮騒田植えイベント
 22日 NPO 法人潮騒 JTC 平成 28 年度総会
 潮騒家族会
 29日 潮騒アディクションセミナー

6月の行事予定

- 5・18日 秋元病院メッセージ
 9日 潮騒俳句会
 19日 みのわマック感謝の集い
 26日 潮騒家族会
 6月下旬 潮騒フラワーロード花植え

編集後記

依存症は一般の疾病や障害分野と異なる特異性があります。治ることのない難しい病気であることは疑いがないですが、うまく付き合い続けることで、心と体へのダメージの進行は何とか食い止めることができます。それでも、ふとしたきっかけで再発するのは、人間の魂の奥に潜む＜何ものか＞に関係するからなのでしょう。神様の戯れと言ったら、信心深い方からは叱られるかもしれません。12ステップでは、この名状しがたい＜何ものか＞との果てしない闘いを放棄して、自分の無力を認め、自分を超越する偉大な力(ハイヤーパワー)に我が身を委ねることを教えています。ダルクも潮騒も今のところ、この回復プログラム(12ステップ)の有効性を信じてリハビリ活動の柱に位置付けていますが、時代の流れか、これでは対応できない流れが激しくなっています。一方で施設が掲げる就労支援と社会復帰の現実もなかなか進みません。潮騒では、人生の早い段階で学校で教育を受ける機会から疎外された者が多く、これが病気の回復を妨げている面は否定できません。そのため、「学びに遅いはない」との考えから潮騒独自のスタイルで「教育」支援を図るのが、本号で取り上げている「潮騒人間塾」の取り組みです。その発端が栗原センター長の「学び」に対する謙虚で前向きな姿勢です。潮騒入寮者の皆さんは、前の前に学ぶに足る第1級の先輩回復者がいることをもっと意識してほしいなあ、と思います。(市)

献金・献品を頂いた方 (5月15日現在)

- ・ 相談者 様
- ・ 匿名希望 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
 本当にありがとうございました。
 おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しく願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

潮騒通信 どっこい生きてます! 2016年5号**Contents**

- P② 仲間達の「生きるを支える」試みをしたい
 P③ NPO 法人・潮騒 JTCの平成28年度総会開く
 P④ 依存症の回復を補完する「潮騒人間塾」
 P⑥ ユタカ VS トム 対談 第4回
 「第5回 スポンサーシップの絆が互いの回復と成長に繋がる」
 P⑧ 受刑者 Q&A コーナー
 P⑨ デイケアの仲間が息栖神社で初の清掃ボランティアに励む
 ソフトボール交流試合で百寿亭チームと熱戦を展開
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇「耕す」
 P⑭ どっこい私も生きてます「トンちゃんの回復記」第3回

■ 編集・発行：

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
 TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56号
 〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16
 TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田
 〒311-2113 茨城県鉾田市上幡木 1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



